

第5回ブータン旅行【上】

(2019年4月14日～4月17日)

2019年4月14日から25日の期間、私は5度目のブータンの旅をした。これからその記録をここに記そうと思う。

今までの旅についてもそれぞれ記録してきたが、それらをまだ読んでいただいたことがない方々と、読んでもう覚えていないという方々のためにもう一度それらのことをざっと紹介させていただきたい。



今回のブータン旅行

- ① 私の初めてのブータンの旅は、2012年8月11日から18日に亘って行われた。前年11月のブータン国王ご夫妻のご来日がきっかけでブータンという国に強い関心を抱いた私は何が何でもブータンという国に行ってみようと思うようになり、翌年実行するに至った。そしてこれは私の初めての海外一人旅であった。そしてパロやティンポ、プナカ、トンサなど、ブータンの西半分の主な町や地域を見てまわった。
- ② 次に行ったのは2013年の11月30日から12月4日にかけてである。オグロヅルが飛来することで有名なポブジカというところに行ってみたくなり、三泊五日で行ってきた。
- ③ 三度目は2015年である。しかし本当は前々からスペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラという所に向けての巡礼の旅を一か月ほどかけてやりたくて、数年前から行かせてくれと夫を口説きつづけていた。そろそろ行くぞ！と思っていたのだが、もう一年待ってくれと夫が言うのでそれは翌年の2016年に行くことにしてそれまでのつなぎにその年はまたブータンに行くことにして、六泊八日の旅を行った。この時はトンサよりさらに東のブムタンまで行った。プナカでは小学校の見学もさせていただいた。この時もまた、とても充実した旅を行うことができた。
- ④ 四度目は2017年である。2016年にスペインのサンチアゴ・デ・コンポステーラ行きでとうとう一か月の旅を強行した。しかし結果的にはいろいろと力及ばぬところがあり目的を完遂できなかった。だからぜひリベンジをやりたい！しかしやはり二年続けて長期間家を空けるのは気が引ける、ということで今年は短期間にしなくてはならない。つまりまた「つなぎ」の旅だ。でもつなぎであろうがなかろうが、私はもう一年に一度は一人で日本脱出をやらなくては生きていけなくなってしまう。

周囲をおもんばかって遠慮ばかりしていると「私っていったい何？」と考えて腹が立ってくるのである。私が不在になると家族はとても辛いらしい。でもこれは喜ばなくてはならないことだろうか？愛されているんだ、

尊重されているんだと考えて有難く思わなくてはならないことだろうか？健康にも恵まれず家族がいなくて寂しくて辛い思いをしている人と比較しなくてはならないことだろうか？違うような気がする。そういう意見というのは結局「女は人の世話をするために、人に頼られるために生まれてきたのだ。」というところに話を帰着させたいだけではないのか？

そういうわけでこの年はブータンの最西部の「ハ」という町を目的地にして三泊五日で行ってきた。2012年に靴擦れ発生のために中退したタクツァン僧院詣でも付け加えた。

そして2018年にはスペインに出かけ、九泊十一日で二年前に歩ききれなかった「フランス人の道」(巡礼路は幾通りもあるがここが一番ポピュラーである)の最初の110kmだけを歩き通してきた。前回ではバスや列車で繋いで途切れ途切れにしか歩いてこなかったのだ。また一か月やそれ以上というのは諦めるとしても、願わくはまた何とか自分の納得のできる巡礼旅をしに出掛けたいものである。しかしそれにはやはり二週間ぐらいは家を空けなくてはならない。少しでも家族の気持ちを落ち着かせるために今年は少しでも短めの旅を、と考えてまたブータンにしたのだが、今回は東部地方にも行くことにしてしまったために十泊十二日の結構長めの旅になってしまった。もう二、三日短くできるのではないかというのは日本人が陥りやすい甘い考えであった。ブータンの道路事情や飛行機の運行情報を考慮するとそんなにタイトなスケジュールは組めないであった。

それで結局今年は十二日家を空けた。去年は十一日だったのでそれより一日長い。来年は二週間ぐらいもらう予定でいる。ごめんね～という気持ちと、いいじゃんこれくらい！という気持ちとが交錯する。だって行けるときに(私の体が動くうちという意味)行かないと一生行けなくなるではないか。そう言いながら毎年行っているって？主婦が海外旅行なんて一生に一回でも行けたら御の字と思って満足しろって？そりゃあおかしいよ、やっぱり。安楽な家庭をマネジメントするという任務は一年のうち350日も果たしているんだからいいじゃないか。私も多少は稼いでいるし家計に負担はかけていない。これは私の最低必要な自己表現であり息抜きなのだから。

さて、いつもの長い前置きを終了して本文に入る。

4月13日 18:50、家を出発した。夫と娘の夕食は並べたが私はたまには外食がしたいのでまだ食べない。行きがけに大宮駅西口の「天井てんや」に行き小天井を食べる。

京浜東北線と東京モノレールを利用して羽田へ。21:00頃到着。羽田空港は飲食店やショップなども多く見物して歩くのも悪くはないと思うが、歩き回って疲れるのも得策ではないしお金を減らしたり持ち物を増やしたりするわけにもいかないので渡航の手続きと両替以外は何もせずに待つ。0:40発のJALに乗ることになっている。

私はブータンに行くときにはいつも同じ旅行会社を利用しているのでそこにとっては私は上得意様である。それでこれまでも許される範囲でいろいろ便宜をはかっていた。それで今回座席はすべて通路側ということになった。これはトイレの近い(緊張すると行きたくなる)私にとっては大変有難いことである。しかしそれでもけっこうしんどかった。

私はブータンに行くときにはいつもバンコク経由だったので、バンコクまでタイ航空を利用していた。しかし今回は帰路がブータンのパロ空港から引き返すのではなく、ブータンを西から東に横断して陸路でインドに抜けてインド東部のグアハティ空港→シンガポール→羽田というルートをとることになった。利用する航空会社は往復とも同じにしなければならないという決まりがあるようで、ルートと時間の都合から私にとって

は初めてのJAL利用となった。JALは日本人にとっては機内食の内容とかいろいろなサービスの点でなじみやすく快適なのかなあと何となく思っていたのだが実際には必ずしもそうとは限らないと感じた

出発時刻は以前は羽田を0:20であったが今回は0:40であった。たった二十分の違いだがこれは大きなことであった。気分的にも「0時を過ぎたばかり」と「1時に近い」という違いがあるが、搭乗して飛び立つと間もなく深夜にもかかわらず食事のサービスがある。だいたいこの便だと夜食と朝食との二回、結構なボリュームのものが提供される。つまり変な時間に二回も食事をさせられる。これが結構疲れるのだ。

朝食が午前三時ごろというのもしんどいが、夜食が零時半ごろなのか一時過ぎなのかでは負担の大きさがかなり違う。だから席が通路側とはいえ、CAさんが通路をワゴンと共に通過している時間も多いため、そうそう自由に出歩けるわけでもないのである。そういうことなので、座席が通路側なのはかなり有難いことであったが七時間のフライトの間に二度トイレに行った以外はずっと狭いスペースに座りっきりだったわけで、他の方々も皆そうだったことであろうがやはり体にとってはかなり負担であった。

ところで機内食についてであるが、今回は何故か何が出たのかを全く思い出せない。多分タイ航空の時とそう変わらないものが出たのであろう。疲れるなあ、とばかり考えていて心に余裕がないとそうなるようだ。フライトが楽しかった時には結構覚えているのだ。そういうわけで何が出て何を食べたのかは思い出せないのだが食べられる物だけ食べて持ち歩ける物をいくつかテイクアウトしてバンコクでの待ち時間にすこし食べたような気がする。それから機内食のサービスは一度だけだった。あれ？と思ったがむしろ助かった。

バンコクまでのフライト時間はたかだか七時間でヨーロッパに行くときよりはるかに短いのであるが、その間にどうやら二時間ぐらいは眠ったようであった。そして、あと何時間、あと何時間と数えながらやがて飛行機はバンコクのスワンナプーム国際空港に着いた。

今回スワンナプームでの乗り換え時間が二時間弱しかないのでかなり心配だった。飛行機の到着が遅れたりしたらどうしよう？今までは幸いにもそのようなことは皆無で、むしろ10分程度早く着いたりすることのほうが多かったのだが乗り換えにはそれなりの手続きがいるのである。長い長い通路を移動し(動く歩道があったりもする)ドック・エアー(ブータンの航空会社)のカウンターを探し、荷物検査と身体検査も受けなくてはならない。タイ航空で着く場合よりもJALで着く場合のほうがドック・エアーのカウンターまでの距離が短いと聞いていたし(実際そうだったが)それでも心配でたまらない私は何かあったら旅行会社の営業さんのケータイに夜中であっても連絡してよいという約束を取り付けてあった。

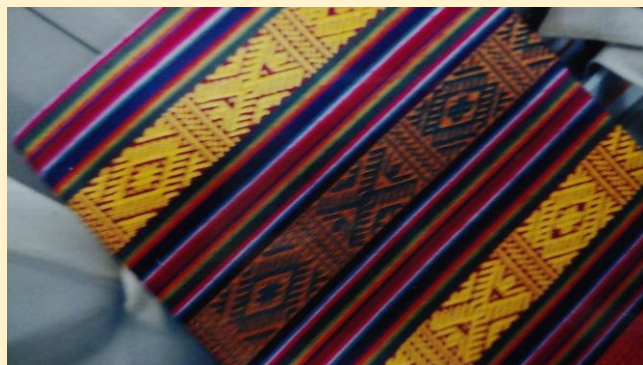
しかし今回も時間的には問題なく無事に手続きを済ませることができ、ドック・エアー6:50発パロ行きの搭乗ゲート近くの待合場所で待つ。ちょっとだけ時間があつたので家に連絡をしようと思うが私は去年の夏にスマホに替えたばかり。ガラケーの時にはかなり気楽に海外から電話やメールをしていたのだが、スマホになってからのほうがなんだか使用の手順が複雑そうである。ドコモに問い合わせたそのやり方はちゃんと聞いてあつたのだが本当にちゃんと通話やメールができるかどうか不安だった。で、そこで初めてそれを試す。かなりもたついたがどうにか通信できることがわかった。

が、ついでに一つ間違い電話をかけてしまった。自宅にかけたつもりだったのに知らない家にかかってしまった。と思ったのだが数秒後、ある知人の家だ、と気が付いた。発信記録のリストの隣合っているところにかけてしまっていた。あーあ・・・帰国後に謝ればいいのか。

時間的にはそう忙しいこともなく無事にドック・エアーに搭乗する。と、・・・あれ？座席、本当にここでいいのだろうか？ビジネス席に見える。「本当にここでいいのか？」とCAさんに確認するが間違いではなかった。ビジネスといっても小さめの機体なのでエコノミーとの空間的広さの違いはそんなにない。足を伸ばせるというほどでもないが、身の回りに手荷物が楽に置いて、背伸びぐらひはでき、隣の人に気兼ねなく身動きができるというくらいのスペースである。



ドック・エア機内の座席にて



機内食のメニューの表紙

しかし何より機内食の違いが大きかった。朝6:50から8:50の間の三時間（タイとブータンの間の時差が一時間なので）のフライトにすぎないのに、朝食というにはあまりにも豪華な、ディナーといってもいいくらいのメニューが用意されていた。せっかくサービスでビジネス席にさせていただいても時すでに遅しで、もう私の胃は夜行便の疲れでフリーズしてしまっていてその豪華なお食事はほとんど食べられなかった。ああ勿体ない！もう次からは夜行のエコノミーはやめよう。もっとお金を貯めて、夜行ならビジネスに乗るんだ！昼間ならエコノミーでもいいけど。最近こういうことをかなり真剣に考えている。

さて4月14日の朝10時ごろブータンのパロ空港に到着する。空港建物の外壁に取り付けられた大きな写真パネルは三歳に成長された王子様をはさんだ国王ご夫妻のもの。二年前に来た時に見たパネルは王子様がまだ赤ちゃんの時のものであった。



私は荷物は預けないことにしたのですんなりと手続きを終えて外に出る。預け荷物が出てくるのを待っているのがいやなのである。（だから荷物はコンパクトに作る）しかしいつもならすぐに出会えるはずのガイドさんと出会うことができない。おかしいなあ・・・私はまだ海外で国内電話をかけたことがなく不安であるが、ガイドさんのスマホの番号はわかっているのでそこにかけてみる。しかし何度かけてもかからない。やっぱり私の知らないマニュアルが何かあるのだな。

しかし十分後ガイドのキンレイ・ドルジさんが現れて無事に合流を果たす。

「遅れてすみません。道がこんでいて。」

と言っていた。そうお？渋滞なんかしてる？と内心思ったが無事に会えたのでまあよし。

運転手さんの名前は聞かなかった。どのみちこの運転手さんとは明日までのお付き合いだから。名前を聞く

必要はないということではないのだが例えばタクシーに乗った時に運転手さんの名前を必ずしも確認したりしないだろう。それと同じである。

車はワゴン車だった。たまたまそれしか空いていなかったということだろう。「今日は大きい車だけど明日からは変わります。」とキンレイさんが言った。彼は日本語が堪能であった。

私は「今回のガイドさんはキンレイという人で、以前私を担当したことがある。」と聞いていたので「キンレイという名前の人は2015年にドライバーだった背が高く色が浅黒く彫りの深い顔のキンレイさんしかいないなあ。」と思った。そう言ったら旅行会社の人「ドライバーがガイドに転向することはないはずだが？」と言っていた。そしてその時現れたキンレイさんは、2015年のキンレイさんとは全く別の人であった。しかし話をしてみると2013年に鶴で有名なポブジカに行ったときにお世話になったガイドさんであるらしかった。その時はガイドさんたちの写真は写さなかったのではっきり顔を覚えていないのだが日本語が堪能であったということは一致しているし、その時の人の名前はキンレイではなかったような気がするが同じ人なのだ、と納得することにした。ちなみに家に帰ってからその時のガイドさんの名前を調べると「ウゲン」になっていた。違うじゃないか！？と思ったがその時聞いたことのほうが間違っていたのだろうと思うことにした。そのとき私はガイドさんを特にウゲンさん、ウゲンさんと呼んだりしていたわけではなかった。

さてそのあと私たちの車はパロ空港からシンゲダという山寺参りに向かった。パロからブムタンまで翌日国内線の飛行機に乗ることになっているが、「なぜすぐ乗り換ええないんだろう？時間的にもすぐに出発することは可能だし特にパロに一泊しなくてはならない理由はないのに。」と思っていた。私は今まで何度もパロに来ているし、今回はブムタン以東を観光したかったのである。しかしなぜだか「パロに一泊してからブムタンに向かってほしい」とブータン側の旅行会社が言っているということなので、仕方がない、何か理由があるのだろう、別に深く追求しなくてもいいやと思いきそれに従うことにしたのであったがそういうわけでわざわざまる一日パロに滞在するのだから何か有意義なことをしなくてはと思い、私がリクエストしたことであった。

しかしそのシンゲダ詣では挫折した。私は高度障害の影響が現れ、車を降りたところから歩き始めたところ全くどうしようもない状態になった。息が苦しい。荷物など持っていないのに死にそうな気分になる。パロの街の標高はたかだか2400mほどであるが、いきなり飛行機で飛んでくるので身体が慣れていない。低い場所から徒歩や車や電車で上がって来るなら問題のない高さなのだがいきなり飛行機できてすぐなので、いつもそのあと車酔いを発症していた。それなのに三十分ほどの歩きとはいえ登山を組み込んでもらってしまった私はバカだった。

車を降りて100mも歩かないうちに私はギブアップした。「やめてもいいですかあ・・・」それで山寺参りはキンレイさんと運転手さんだけが行き、私は車を停めたところで待っていることにした。



このあたりで私は大きな石の上に腰かけてガイドさんたちが戻ってくるのを待っていた。

ブータンの人々はとても信心深い敬虔な仏教徒である。ここまで来てお参りが中止になるなんて耐えがたかろう。それにその日は何か重要な仏教の祝日だったようで、それを記念してその山寺にお参りする人たちがけ

っこうたくさんいた。皆その地点までタクシーや、家族か知人の車でやってきて、そこから山寺に向かって徒歩で登って行くが、一人ぽつんと岩に腰かけている私を怪訝そうに見ていく。若い人には英語で事情説明をすればすぐに納得してもらえるが、老人（ひょっとしたら私より若いかもしれないが）の場合は英語がわからない場合も多いのでちょっと意思疎通に時間がかかる。

ガイドさんたちは一時間ほどで戻ってきて、そのあと私たちは「ジャンカ・リゾート」というホテルに向かった。私は少し身体を休めた方がいいと判断してくれたのである。そして私は部屋で一時間ほど休憩し、そのあと12:30に集合して予約してあったらしいチャロ・レストランというところへ。ここは二年前にも来たことがある。食事は美味しくいただけた。



ホテルのロビーとサロン



チャロレストランにて

そのあとこれも二年前に訪れてかなり気に入っていた博物館に行ってみようとしたが、途中で「今日は閉まっている」という情報が入り中止にして引き返した。それで13:30またホテルに戻る。

それからはずっとベッドでゴロゴロしている。夫にメール、息子と娘にそれぞれラインを送る。このホテルはブータンにはよくあるコテージ式で、広い美しい庭の中に二階建ての中央棟と平屋の宿泊棟が散在している。全部が一つの建物に収まっているホテルとコテージ式のとでは後者のほうが少し多い気がする。コテージ式の場合、宿泊棟は平屋の場合もあるし二階建ての場合もある。中央棟だけ三階、四階ある場合もある。五階以上の建物はまだ記憶にない。ブータンの場合高層建築を建てるより広い敷地に（といっても平地はほとんどないので斜面上ということも多い）にいくつも小さい建物を作るほうが何かと都合がいいのかもしれない。



ホテルの庭園はどこも美しい

しかしどんなホテルであっても時々キーが堅くて回しにくいことがある。けっこうしばしばある。建付けが悪いのか私に力がなさすぎるのか、とにかく手に負えないことが多々ありよく人を呼んで開けてもらっていた。ここでもそうだった。でも閉める方はいつも簡単にできた。

部屋で残金を数えた。日本円を少し残しておいたのは別として米ドルが250ドル、ヌルタムが13640ヌルタムであった。(1ヌルタムは2円ぐらい。ドルを全部ヌルタムに替えてしまうと後で余った場合ドルに戻すのが面倒なのでドルを残してある。ブータン国内でも大きい店ではドルが使えるし最後にガイドさんに渡すお礼はドルでも大丈夫そうである。) と言ってもまだパロ空港で米ドルをヌルタムに交換してからお金は使っていない。外国人がブータンを旅行する場合、料金は必要なだけ全部支払い済みなので、お土産代とお寺へのお賽銭やホテルやガイドさんなどへのチップ(もちろん義務ではない)、あるいは特に予定外の飲食でもしない限りはお金を使う必要がない。

7:00 PMからホテル内のレストランに夕食に行く。ブータン料理は本来激辛なものであるが、外国人向けには辛くないものを用意してくれてあるので問題はない。民泊をした場合には要注意だが。形式はほとんどブータン定食で白飯と数種類の野菜炒めや肉を佃煮のように甘辛く煮付けたようなおかずを自分の食べられる量だけ取り分けて食べる感じである。白飯といっても米は日本の米とタイ米との中間くらいの感じ。これにスープや味噌汁のようなものがつくこともある。また米の他に焼きそばやマカロニ料理や赤米の炊いたのが付け加えられていることもある。(朝食の場合はホテルでは英国式のことが多く、民泊の場合はブータン定食のことが多い) ただおかずのなかにたいいてい一種類だけ激辛料理がつけてある。そりゃあ外国人だって中には辛い物が食べたい人もいるだろうから。



ホテルの夕食

私は以前無理をして辛い物を食べすぎて体調を崩しひどい目にあったことがあるのもうブータンで辛い物は食べないことにしていた。それで辛いものだけ食べているつもりだったのだがなぜかその中に何か一粒だけ激辛の物体が混入していた。それでもう食べ終わり近くなったある瞬間、私は飛び上がった！HOT！HOT！TOO HOT！！あいにくミルクティ（お飲み物は？と聞かれるといつも出してもらっている）は飲み終わってしまったところ。急いで手を挙げて「もう一杯ミルクティを」と頼んだが、メイドさんたちは忙しくてなかなか持ってきてくれない。こういう場合、水は全く役に立たない。デザートに運ばれてきていたスイカでしのいでいたが、水よりはマシかも？という程度でかなり難儀をした。ミルクティが届いたころにはもう辛みは半分以上発散していたが、それでもまあ役にたった。本当にひどい目にあった。

8：30ごろ入浴する。バスタブはついていたのかいなかったのかなぜか覚えていない。ついていたとしてもシャワーだけ浴びたような気がする。バスタブがあっても湯をたくさん貯めるのが面倒だったりあまり大量に湯を使うのは申し訳ないような気がしたりするのである。

4月15日（月）

2：00前に目がさめる。前日の午後からよく寝ていたせいでしばらくは眠くならなそうである。そういえば日本時間ではもう5：00だ。立派な排便がある。それまで何度か排便はあったが渋滞気味であった。すっきりしたが、でもまだ書き物などをやる気にはならない。なぜか手首がしんどい。湿布を貼る。

5：00から着替え、荷造り。昨日履いていたキャラバンシューズをスーパーテクニックでバッグの中に入れる。5：20ごろ外が明るくなり始める。

6：00少し前、支度が全て終わったのでガイドブックを読んでいると外でうるさいほどの鳥の声・・・あれっ？急に止んだ・・・

ホテルの部屋の中で出発前とか食事前などに時間が余っているといつもベッドに寝そべって大きな窓から空や山を眺めている。コテージ式のところでは大概部屋に大きな窓があり、眺望の良い側に面している。ぜーたくだろお～？

ブータンの旅ではこういうことができる。日本だと高級ホテルは知らないが、安いホテルだと殺風景なものである。そういえばフランス、ドイツ、スペインなどでも私はこういう眺望が売りのホテルには泊まったことがない。泊まれるだけで上等！と思っているので別に気にしたことはなかったが。

それから旅の際の空き時間をぼーっと過ごすのは一人旅でないとできない。いや、ぼーっと過ごしたいかアクティブに動きたいかを自分で決められるから一人がいいのだ。それに私の「連れ」になる可能性のある人というのは私のしたい旅に対する予備知識やモチベーションなどがほとんどない。言ってみれば彼や彼女は私と一緒に居られないのはつまらないからくっついて来るだけである。だから私のすることと同じことをさせようとすると疲れるだろうし退屈するだろうと思う。

それに私は自分自身の体調管理だけでもとても大変なのである。特に深夜便利用や標高のせいなどでまた食事のせいなどでもかなりしんどい目にあっている。精一杯注意をされていてさえそうなのだから気合の足りない人間を同行させるなどとてもできない。

でももし何年か後にもし夫婦で4～5日旅行しても大丈夫な状態になったら（娘が精神的に独り立ちをしてくれたらということである。）夫と一緒にヨーロッパとかブータンの狭い範囲内でゆっくり過ごすような旅してみたいなと思っている。



朝食

さて本日はパロの空港から国内線で中部地方のブムタンに向かう。首都のティンブーや国際空港のあるパロはブータンの西部にある。そしてブータン国内の移動は普通車である。しかし高速道路というものは無い。ついでに言えば鉄道もない。(ご存知ない方のために念のために付け加えた。)車といっても外国人が利用できるようなバスやタクシーはないので必ず専用車と運転手がつく。つまりハイヤーがあてがわれるようなものである。このシステムが最もコスパがいいのである。

しかし道路の事情は一般日本人にはなかなか想像しがたいハードなものである。ブータンは国土のほぼ100%が山、と言ってもいいくらいの平地の少ないところであり、自動車道はかなりの割合で険しい山の斜面をトラバースしながら走り、主要道路はかなり舗装が進んでいるとはいえ山肌はリアス式海岸のように入り組んでいて、しかもブータンではトンネルを穿ったり谷の間に強引に陸橋を作ったりして道路を直線にしようということを決してしない。道は自然の地形に従い昔からある村や畑をどこかに移動させたりましてやつぶしたりすることもなく、後から作られる道はもともとあるものを避けて迂回しながら進んでいく。だから移動にはとてつもなく時間がかかる。

例えばパロからブムタンまで車で行くとなると、一日七時間走ったとして二日かかる。しかし飛行機で飛ぶと30分である。通常こんなに差がつくことは日本ではありえないだろう。

しかしブータン国内を飛行機で移動することはそんなにポピュラーではない。数年前のガイドブックには「旅行者がガイドの飛行機代まで負担しなくてはならないので一般的な方法ではない」と書かれてあり、私も初めは国内線の飛行機利用など想定してはいなかった。しかし今回私がブータンの最東部まで行ってみたいという希望を出したので旅行会社側は時間の節約のためかガイドさん運転手さんの負担軽減のためか、私が過去に通過したことのある区間を飛行機で一気に飛び越えることにしてくれた。

費用はかなりサービスしてくれたらしい。今回私は十二日間の旅をしたが、四年前に八日間の旅をした時より五万円高いくらいの費用ですんだのだから。



国内線の小型機で中部地方に向かう。

それにしても国内線の小さい飛行機に乗るのは初めてでドキドキである。キンレイさんも飛行機でブムタンに行くのは初めてだという。それは40人乗りぐらいである。機内は狭い。普通のエコノミー席よりさらに狭い。天井の高さも二メートルあるかないか。頭上の荷物入れには私でも楽々手が届く。

パロ部分担当の運転手さんとは空港前で別れたので(ブムタンから後の部分では23日に国境を出るまで別の運転手さんと車がつく)私はキンレイさんと一緒に機内に収まる。私たちは通路の左側の席で前から二番目だったが私たちの前の席にえんじ色の衣を纏ったお坊様とお供らしい方がいた。ブータンの僧侶の衣の色は高位の方から日本なら小坊主にあたる子供たち(仏教学校の生徒であろう)まで皆えんじ色なので、他に何か違うところがあるのか私には見ただけではわからないが、キンレイさんが言うには私の前に座っていらっしゃるその方は僧正様のような大変偉い方だということであった。しかし国内トップというわけではないらしい。

やがて飛行機は飛び立つ。私が今まで乗ったことがある中で最小サイズのその飛行機は、揺れが大きい気がしてとても緊張する。でも飛行高度は大型機の時より低めなようで、眼下の景色に対してあれがティンプーの町とかプナカの町などと説明してもらいながら谷や川や斜面の形状、植生の変化、段々畑の様子などが良く眺められとても感動的であった。

わずか30分のフライトであったのに軽食の入ったランチボックスが配られた。マクドナルドのアップルパイのような長方形の形をしたミートパイと三角のポテトサラダのサンドイッチ、ナッツの小袋、紙パック入りのマンゴージュースが入っていた。私はマンゴージュースだけ機内で飲み、あとは荷物の中にしまって飛行機を降りた。

到着したブムタン(県名ではあるが町の名前ではない)のパッパラタン空港はほとんど何もない草野球場ぐらいの原っぱで、離れて見た感じでは「小屋」に毛が生えた程度の小さな建物がぼつんと建っているだけだった。が、そこの中に入ることはなかった。そしてその周辺に十何台かの送迎に來ている車が停まっていた。そして少し離れたところに何か建設中の建物のようなものが見える。新しい空港ビルを造るところらしかった。



ブムタンのパッパラタン空港に到着



空港の建物はこれだけ



預かり荷物が搬出されて運ばれてきた！！

通常なら機内に持ち込める程度の手荷物も半分預けなくてはならなかった。座席周りや頭上の荷物入れが狭いせいだろう。その預かり荷物を運び出して搭載した車がやってきた。トラクターにリヤカーのような荷物台が連結してある感じ。なんとも可愛らしくのどかな光景であった。

空港で待っていてくれた車に乗って次に向かう。今度の運転手さんはウゲンという名前だった。ちなみにブータン人の名前はそんなに種類が多くないらしくてウゲンとかキンレイという名前の人はあちこちにいる。チャールズとかヘンリーのような英語の名前よりも種類が少ないかもしれない。それからブータンには姓というものがないと聞いたことがある。例えばキンレイ・ドルジという名前の場合、どちらかが姓でどちらかがその人だけの名前というわけではなくただ単に二つの名前を並べてつけただけ、ということのようである。



ランチボックスの中のサンドイッチとパイ



リンチェンロッジの庭



ホテルのロビーの横には大概このようなサロンがある。

空港からすぐに「リンチェン・ロッジ」というホテルに行き、部屋に荷物を置いてくる。そのあと「ジャンパ・ラカン」というお寺を見学に行く。いや、見学というよりはお参りである。ブータン人はお寺に行くとき皆作法通りの拝礼をする。これは私もしたくないわけではないのだが慣れないとその動作が難しい。外国人は宗教の違いということもあるし無理に礼拝しなくてもいいのであり私は他の外国人客が、ガイドさんが拝礼しているそばでただ突っ立っているのを何度も見たことがあるが、ちょっと気まずいものである。私はいつもどうしているかというとその時のガイドさんの雰囲気によって一緒に拝礼したりしなかったりする。私は当然チベット仏教の信徒ではない。しかし何もしないのも失礼な気がして悩む。かといってガイドさんと同じようにしようとしても動作が追い付かず無様な姿を見せているような気がしてどちらにしても悩ましいことである。



ジャンパ・ラカンというお寺を見学しましたがこの写真では全体像がわかりませんね。



寺の入り口のところ



寺の中庭のようなスペース

ブータンのお寺の様子について説明するのは私には難しい。どのお寺も皆同じように見えてしまうからだ。ガイドさんたちはいつもそれぞれのお寺の歴史や特徴などについて一所懸命説明してくださるのだが私の頭にはさっぱり入らない。いや・・・どなたがブータンに初めて仏教を伝えたとかどなたがどのお寺を建てたとかどういう業績を残されたとかそういう話をいつも聞かされているような気がするのだが、それらのストーリーが毎回同じように聞こえて それだけのことを説明するのに話があれだけ長いのか？みたいな感じで私の頭脳が受け取っているのだ。いや、それは決してガイドさんたちの説明が悪いのではなく私の理解力が足りないからだと思うのだが、でも今回のこのお寺に対しては強い印象が残った。

建物がことのほか美しいと思ったのだ。何が？・・・と言ってもそこが私には説明できないのだ。いつも一度に一つしか見ていないのだから。いろんなお寺をいろいろな場所や角度から撮影した写真集でもあればこれがこうだ、あれがどうだといろいろ比較しながら説明できるかもしれないのだが・・・ああ、私はブータン通い五回目にしてようやくここまで説明できるようになったということだ。そのあとホテルに戻って昼食をいただく。いつもと同じブータン定食である。



ホテルの庭の中には美しい場所が多い。



こういう食事の形態はアジア諸国では一般的に思える。

午後はメンパル・ツォというところに行く。「メンパル・ツォ」とは「燃える湖」という意味であるがここはどう見ても湖ではなく岩石に囲まれたただの淵なのであるが、なぜかそういう名がついている。伝説はガイドブックにも記載してあるのでそのまま紹介するが、埋蔵法典発見者として名高いペマ・リンパというお方が群衆が見守る中この淵に飛び込み貴重な法典や宝物を持ち帰ったという。その際手にしていたバターランプが水の中でも消えずに燃え続けていたという話なのだ。



メンパル・ツォにて。屋根付きの橋が架けられている。

私は四年前にもここを訪れているのだが、今回キンレイさんが言うには二年前にここで事故があった。ある観光客が淵に転落し、それを見たガイドもパニックになって「助けなければ！」と飛び込み二人とも亡くなったということである。それはそうだろうなあ・・・と私は思った。水泳のトレーニングを受けたことのあるブータン人なんてまずいないのではないかと思う。子供の時に川遊びをすることがあるくらいなもので、ブータンには海はないし水泳用のプールなんて一つもないはずである。水泳の技術を学びたいと思う人は外国へ留学しなくてはならないだろう。ブータンでは子供に水泳の教育をする必要があるなどと考える人はほとんどいなさそうである。

ブータンには川はあっても大河はなく皆浅く流れている。山襲に分け入れれば深い淵もあるが、そこで泳いでみようなんて考えるひとはまずいないだろう。淵とは落ちないように気を付けるべきところであり泳ぐところではない。そのガイドさん気の毒に！そりゃあパニックにもなるだろう。

そういう事故が起こってもブータンではそんなにすぐには救助とか遺体引き上げとかの対応ができないのだろうな。みんなスマホは持っているから旅行会社や警察などへの連絡はすぐにもできるとしても多分インド軍とかの手を借りないと対処できないんだらうな・・・そんなことを私はいつまでも考えていた。



ブータンのファミリーマート！

帰り道、ジャッカル町の商店街を通ったら「ファミリーマート」という名前の店があった。生活雑貨や袋菓子やインスタント食品などがぎっしり並べられて売られていた。あまり期待せずに入ってみたのだが商品を物色するのはけっこう楽しかった。もちろんここは日本のコンビニとは無関係である。

私はそこでお土産用にお茶を買った。私は海外の場合に限らず旅行の際には荷物をできるだけ小さくするように心掛けている。自分の体力が乏しいので重い大きい荷物は持ち歩けないし、スーツケースはガラガラ大きな音をたてて嫌だし動かしにくいので大嫌い、ということもあるが飛行機に乗る際に荷物を預けるのもできるだけ避けたいのだ。ロストバゲッジというのがあっても困るし、ベルトコンベアの上をぐるぐる回っている荷物との再会を待つ時間も勿体ないのだ。だから私はお土産もできるだけ小さくて軽いものを選ぶ。差し上げる相手にもそれは理解してもらおう。といってもお土産を買ってくる相手は家族といつもいろいろ世話になっている弟、妹、義姉、息子夫婦に限り、他の人々には知人友人であろうとも「ごめんね～、日本みたいいろいろ売ってなくて～」ということと理解していただく。確かに無理に何かを買ってきて贈っても趣味や好みが合わずに「イヤゲモノ」と思われるよりは土産話を聞いていただき写真を見ていただくにすることがずっとマシであろうと思う。

ブータンではモノを大量生産するような工業が発達していない。と言うか初めからあえてそういうことには手を出さないらしい。そういうことに費用や労力をかけてもコスパが悪すぎるのである。そういう産業は中国やインドやタイやその他の大国に任せてブータンはブータンしかできないことをやるという主義のようだ。だから正真正銘手作りの手工芸品やジャム、チーズ、お茶ぐらいのかなり限定された製品しか保存のきくブータン製のお土産品というものはない。町で揚げ菓子のようなものは売られているが、長期保存や輸送に向けたパッケージになっていないので海外に持ち出すお土産品には向かない。ブータンで売られている大量生産品はほとんど全て周辺国からの輸入品である。そういうものをわざわざ買って帰る気にはならないのでやはり「軽いブータン土産」の代表選手はお茶であろうと私は考えている。

14：40、ホテルに戻ってスマホ充電を試みる。海外用の充電器具だがコンセントの形の違いに対応するアダプターは私は今まで「Cタイプ」というので間に合っていた。ブータンにおいて今までどのホテルでもCタイプが適合していた。ドイツでもフランスでもスペインでもそうだった。(言い忘れたが2014年にサン

ティアゴの巡礼の下見としてヨーロッパに行き、オーストリアのウィーンから南仏まで列車で移動してみた。)だから私はもう最近では A だの B だのの器具は持参しないことにしてしまっていた。

ところが前日パロのホテルで充電しようとしたら穴の形が違うので混乱した。ホテルによって違うのだろうか？わー、今夜は充電できないと思ってその日は電池式充電器で充電し、これからずっとこうだと困るので以後はバッテリーの節約に励むことにした。

二泊目のこの宿でここではどうかなあ？と心配したがとりあえずチャレンジ。やっぱり穴の形が違うようだ。でもなぜだか穴の数がとても多い。試しに C の器具を無理やり突っ込んでみたら使えた！そうか、A だか B だかとの兼用だったんだ！そうすると前のホテルでもどうだったのかな。

ノックがあって、美人スタッフさんが顔を出した。様子を見に来てくれたのだ。バスルームのお湯の出し方を聞いた。

【本日の出費】	前泊のホテルにチップ	100	ヌルタム
	パロのドライバーにチップ	500	ヌルタム
	お寺にお賽銭	5	ヌルタム
	お土産の紅茶など	900	ヌルタム

計 1505ヌルタム

【残金】 12135ヌルタム (円、ドル変化なし)

15:50、別に疲れてはいないがヒマなのでベッドに横になっていたら急に合鍵でドアが開けられた。チェーンをかけていたのでよかったがびっくりした。さっきの人とは違う女性スタッフさんだったが何か間違えたのだろうか？「ソリー、ソリー」と言っていたが何のために来たのかはわからなかった。

16:00すぎ、夫にメールを送ったが返事が来ない。「未受信」というのになっている。わけがわからないが電話をしてみる。話は通じた。が、メールの「未受信」が気になってしょうがない。夕食後グーグルで解決法を調べるがなかなかわからず3~4時間悪戦苦闘する。が、そのうち「更新」をタップしたらメールが届いた。なぜだかわからないけどバンザイ！しかし息子や娘に送っているラインはすんなり届いている。

4月16日(火)

夜通し雨が降っていたようだ。お腹がやや落ち着かない気がする。4:30ごろ起きてみる。紅茶を淹れ昨日の機内サービスで出たミートパイを食べる。ブータンのホテルは大概瞬間湯沸かし器を客室に備えてある。

5:00、無事に排便あり。でもトイレトペーパーが非常に少なくなっていたのでケチケチ使用。夕べ夕食に行った時に誰かに言ってもらってこようと思っていたのだが宿泊客がとても多かったようで食堂がとても混雑していて忘れてしまった。雨もかなり降っていたしわざわざもう外に出たくなかったこともある。

スマホに勝手に出てきた MY DAYS とやらの説明を長々と読まされる。わけがわからないのでほとんど読まずに流す。

7:00ごろから雨が止む。よかった！7:30ごろから朝食。

8:20出発。部屋にチップ100ヌルタムを置いてくる。トイレトペーパーが切れそうだったり急に部屋の鍵を開けられたりといろいろあったがまあいいだろう。

さて本日はブムタンからモンガル(どちらも県名であるがモンガルは町の名前でもある)まで7~8時間のロングドライブである。私はそういうのは大好きなのだが走り始めてもその日はなぜだかなかなかハイな気分

になってこなかった。車酔いなどはしなかったのだがなんだかとても疲れる気がした。トシのせいかな？いや、ちょっと違う気がするんだが。

道はくねくね、ガタガタ・・・が、ブータンではどこでもそうである。しかし旅の初日で高度障害の出ている時でもなければそんなものは気にならなかったはずだ。

前半四時間ほどの間は寄れるところは何もなし。でもブータンでは二～三時間何もないのは当たり前である。トイレも危険のないところで車を止めてもらって青空の下で行うのが常である。

私はブムタンより東に向かうのは初めてであった。が、ブムタンとモンガルの間にはトゥムシン・ラという峠があることを知っていた。どんな場所かは全く知らず、知っているのは名前だけであったがそれだけでも私の気持ちはワクワクしていた。

私はなぜかブータンの地名の響きが好きである。峠の名で言えばティンプーとワンデュ・ポダンの間のドチュ・ラ、パロとハの間のチェレ・ラ、ワンデュ・ポダンとトンサの間のペレ・ラ、トンサとブムタンの間のヨドン・ラなど。村の名前もノブディンとかニカチュとかチェンデブジとか、なぜか私の心をほのぼのとさせる響きなのだ。だからトゥムシン・ラというのはどういう所かなとワクワクしていたのだがなかなかそこには至らなかった。

朝一度晴れたのだが車を走らせていくうちに時折雨がパラついたり霧がかかったりした。パラつくだけでなくかなり強い降りになる部分もあった。雨が弱まった時を狙って車を止めてもらってトイレをすませたりした。

霧が立ち込めると周囲はほとんど何も見えなくなる。かすかに左が山側、右が谷川らしい崖や木々の気配がわかる程度の視界の道を、危なげなく車を操っていくドライバーはなんと敏腕であることかといつも思う。雨のほうが強く降っていたとしても霧よりはまだ視界がある。「雨が降ると少し霧が洗い流されるように見える。」と私が言うと、そういうことはないだろうと笑われたが。

そのうち山壁の角度によっては北向きになっているのか道の脇の斜面に雪が残っている部分が多くなってきた。そのあたりでは霧が立ち込めて気温も低かったので窓はほとんど閉めっぱなしで早くこの危険そうな部分を通りぬけてしまいたいと考えていた。

そのうち少し霧が晴れてわりと大きな村が見えてきた。あれ？まだトゥムシン・ラは過ぎていないよな、と思い、「あれは何という村ですか？」とキンレイさんに尋ねてみると「ウラです。」と言った。ウラはトゥムシン・ラの手前の村で、まだブムタンの県内である。トゥムシン・ラまではそこからまだ30分ぐらいかかった。

そしてやっとトゥムシン・ラ(3740m)に至るがあたりは雨と霧が立ち込めている。それで車は全く止まることなく先に進んだ。窓の外にはインド人らしい人たちが大勢いてこちらを見ていた。インドからは観光客もかなり来るが出稼ぎで来て道路工事などに携わっている人もとても多い。外にいたのはそういう人たちかもしれなかった。

トゥムシン・ラを越えたのは昼過ぎである。そのあたりからだんだん天気が回復してきた。暗い森の中の険しい山道の連続から一転して明るい色の牧草地の多いなだらかな広い斜面に入る。センゴルという村である。ガイドブックによればこの街道はあまりにも無人地帯が長かったのでウラの上部にあるシンカルという村の住人が集団移住して新村を作ったのだということである。



センゴルの村のレストラン



右端に見える建物がトイレ

センゴルの村に入りその中心あたりにあったレストランに入り昼食をいただいた。中では薪ストーブの火が燃えていて、今まで寒かったので生き返った気がした。メニューはここでも同じブータン定食である。ホテルでは基本的にガイドとドライバーは客とは別のところで（多分ホテルのスタッフと一緒に）食事をするが、このように移動の途中で外食をする場合は客と同じテーブルを囲むことになる。



寒いので沢山着込みました。



ガイドさんと運転手さん

私は高齢者なので少ししか食べられないが20代かせいぜい30代の男性であるガイドさんたちは誰でもとてもたくさん食べる。おそらく私の5～6倍は食べている。日本人に例えて言うと山盛りどんぶり飯を三杯ぐらいとおかずありっただけ、という感じ。出されたものが無駄にならないので見ていてもとても気持ちがいい



容器は違っても食事の内容や形式はどこも同じ。

食事がすんだあとトイレを借りようとしたらなんと外にあった。しかも道路を挟んで50mも離れたところにある。その木造の新しいトイレの小屋は昔の日本の建てたばかりの公衆トイレという感じだったが残念なことに洋式ではなかった。まあ洋式の設備を作るのは大変なのだから仕方がないが、困ったことにしゃがんだ

り立ったりするためにあってほしい「つかまるもの」が何もなかったので大変苦戦した。周囲の壁も離れていたために手が届かなかった。それでほとんど立ちションに近い形で行わなくてはならず周囲が汚れたが幸い床は全コンクリートで、そばに水をかけて流すための大きなバケツと柄杓があったので何とかコトを済ませることができた。(尾籠な話ばかりですみません。)

食事をして身体も温まったせいaka元気が出てくる。天気が良くなってきたせいもあり、より積極的に窓の外の景色を楽しもうという気になってくる。



屈曲して続く谷沿いの道



ナムリンの大滝

やがてナムリンの大滝というのが現れる。なかなか壮大なものである。そしてそこを過ぎて少し行くと何となく植生が変わってきたように感じた。

「そう、これだよ！」私は思わず声に出して言った。「このような木々の林を眺めていると私はとても元気になる！」

それは明るい広葉樹を中心にした種々雑多な樹木の茂る雑木林だった。スギやトドマツばかりの林じゃなくてブナやカエデやシイなどの多くの広葉樹の混じった雑木林が美しいのは日本でも同じである。しかし私はそのあたりからしばらく続く森がその程度のものではないことに気づいた。

何が日本の林と違うのか？何しろ樹木の種類がものすごく多い。皆温帯の植物だと思うが私の見たことのない植物がたくさんある。種類を数えようという気にもならないほどである。そしてそれらは太古の時代からの原生林である。日本の森や林はいかに自然林であるといっても数百年前から多少は人の手が入っているのではないか？車道から見える範囲の森なら里山の続きのようなものだと思う。

しかしブータンでは村落から離れたところにある山林にはほとんど人の手が入っていないように思う。人が潜って通過したり木の実を拾ったりしたことはあるかもしれないが、木の枝をわざわざ切って何かに利用したりはしていないのではないか？

それとも気候の違いが理由なのか？この森の木の本一本の枝ぶりがそれはもうダイナミックなのである。一本一本が信じられないような芸術的な姿をしているのである。森の木々の姿をダンスに例えて比較してみると、日本の美しい森の姿は普通の群舞である。AKBのダンスやおわらや花笠、阿波踊りのような民謡、あるいはバレエにおける白鳥の群舞、あるいはフォークダンス・・・そのような一種統率のとれた美しい群舞である。しかしブータンの、特にこの地域の雑木林の木々といったらまるで世界各国から八頭身や九頭身の美男美女が何百人も集合して、それぞれが違う振り付けでコンテンポラリーダンスを踊っているようなもの！

私はずっと目を見張ったまま身を乗り出すように窓の外を眺めていた。もしもこの木々の中からどれでも一本を抜き出して日本のどこかの公園に移植したらたちまち名物になるだろう、と思ったが・・・いや、そんなことをしたら必ず「こんな木は邪魔だ！切つてしまえ！」という人が現れるな、とも思った。

この木の姿がすごくいい！！ということ私がいくら語ってもキンレイさんにはよく理解できないようであった。当たり前に見慣れていると特別なものには感じないのだろうし、外国人だって植物や山や地形に興

味のない人にはわからないのだろうなあ。

そしてその風景は30分ぐらい続いたがある村（リンメタンかな？）のところで私の感動はクライマックスになった。それなりの広がりのある谷の両斜面を覆う明るい緑色の村、山肌の全てを緑の段々畑や広葉樹の木立が覆っていてばらばらと民家が点在する。空も晴れ、全てが輝いていた。私の知らない色々な木々が道沿いの所々に林を作り、例のコンテンポラリーダンスのような姿で風にそよいでいる。まるで桃源郷であった。

モンガルってこんなに美しいところだったんだ！もうすぐホテルに着くはず。こんな美しいところにあるホテルに泊まれるなんて、私は何て幸せなんだと思っていた。

ところがその少し先に小さな商店街があって、そこを過ぎると風景が一変した。あれ・・・？何だか美しくも何ともないブータンの田舎町のはずれ、・・・樹木は少なく視界に入る山肌は禿げていて工事の途中みたいな道路も見える・・・みたいな感じになった。が、何よこれ?!とガイドさんに怒るわけにもいかない。しかもこれからホテルまで30kmもあるという。え～？え～？・・・私はがっかりしてすっかり気持ちが萎んでしまった。何だか胃もむかつくようになり、ちょっと寝させてもらいますとばかりに荷物を枕に横になってしまった。

*ちなみにガイドブックにこのような記載があった。

「東西縦貫道のトゥムシン・ラ～リンメタン区間はおよそ3000mの標高差がある。この区間には亜熱帯、暖温帯、冷温帯、亜高山帯の植生が全て含まれており、移動中の数時間の間に日本で言えば知床の植生から那覇の植生まで景観が変化する。このような場所は世界的にも珍しい。」

そうだったのか。私の感じ方では多くの木々が温帯のもので、（そこしか見ていなかったから）その中に当たり前のようにバナナの木々が混ざって生えている、というところだったが確かに前半は針葉樹が多かった（だから面白くなかった）わけだから「亜熱帯から亜高山帯まで全て」という体験はしたのだった。

「ホテルに着きましたよ。」と起こされた。もう午後四時過ぎだった。かなり疲労困憊。家族にメールやラインを送り、しばらく休む。夕食は八時ごろに行くことにする。しかしスマホの充電をしようとしたらコンセントが使えなかった。やっぱり使えるところと使えないところがあるんだな。

それとトイレトペーパーがちょっぴりしかなかったのでフロントに居た若い男性に言いに行く。すぐに出してくれたが何と使いかけで1cmぐらいの厚さしか残っていないロールを二つよこした。「ケチだなあ」と思ってしまっただが、いやいやここは日本ではない。水や紙をふんだんに使う方が非常識なのかもしれない、と考えることにした。

このホテルは「ドゥク・ジョンカル」といい、二泊することになっていた。今までとはちょっと違う形式の部屋であった。ホテルの玄関の少し右のほうに別のドアがあって、そこを開けるとすぐに階段を昇るようになっていて、二階に着くとそこはリビングというか客間のようなところで、その奥のドアの向こうが寝室であった。リビングと寝室の二部屋に分かれているスイートルーム形式はブータンにはよくあるが、階段の下から全部占有しているかたちの部屋は初めてだった。

寝室の奥には当然バスルームもあって、バスタブもついてたがそれがかなり大きかった。長方形ではなくて普通のバスタブを二つ並べたくらいの大きさの正方形、いや正確に言えば角を落として八角形になっている感じだった。お湯はちゃんと出たが、なんだかこれにお湯をたくさん貯めるのは気が引けてシャワーだけ使った。でもバスタオルがなかった。アメニティグッズがいろいろおいてあったりするのに何かアンバランスである。だから自前の小さいタオルですませた。

ところでどのホテルの部屋にもヒーターがついていた。ブータンの気候は日本と同じくらいである。標高が高ければ寒いし低ければ温かい。（といっても標高の高い低いという基準が日本とは大きく違う。日本の標高

ゼロメートルの気温とブータンの標高2000メートルの気温が同じくらいと考えたらいいだろうか。かなり荒っぽい言い方だが。)夜になると寒いのでヒーターを使用した但那の上に、つい洗ったものを掛けたくなる。しかしそれはしてはいけないことのように、そういうことをするとヒーターが妙な音を出す。それで荷物の中を探してみるといつ入れたのか自分でも覚えていなかったがいろいろ紐があったので、戸棚の扉やつまみや扇風機のファンのカバーなどいろいろなものを利用してヒーターの上部に紐を渡してそこに掛けたりした。窮すれば通ずということである。

夜、犬たちの吠え声が非常にうるさかった。ブータンにはどこにでも犬がいるがこんなにうるさいと思ったことはなかった。何だろうな？ここら辺の犬はガラが悪いのかな？とか思ったが後から考え付いたのは、ああ、ホテルのキッチンから出た残り物が放出されて、それを犬たちが奪い合っているんだな、ということであった。

4月17日(木)

3:18~3:30の間、停電した。真っ暗だとトイレに行くのも難儀である。あとから聞いたところによると、雨が降ると停電しやすいということである。そういえば夜中に降っていたようだった。

この日は日帰りでも北方のルンツェという地方(県)まで往復する。クリ・チュという谷川沿いの道を登っていく。(ちなみに「チュ」とは川の意味である。水のこと「チュ」という。それからすでにお気づきのことと思うが「ラ」は峠のことである。)しかしこれはストレートな登りではなく上がったたり下ったりを何度となく繰り返す。クリ・チュの流れはほとんど平らに見えるので、しばしばどちらが上流なのかわからなくなるが、流れにはかなり勢いがあるのが不思議であった。

昨日リンメタンを過ぎてから風景がつまらなくなつたのに一度はがっかりしたもの、いや、モンガル全体で見ればきっと、トゥムシン・ラを挟んでこちら側、つまり東の地域は西の地域とは植生がかなり違うに違いない。だからモンガルの中心部の景色はつまらないかもしれないが、これから北のルンツェや、モンガルよりさらに東のタシガン方面に向かえばきっとまたエキサイティングな風景に出会うことができるに違いないと思っていた。

そして果たしてそれはその通りになった。ルンツェに向かうクリ・チュ沿いの林道から望む景色は明るく、深山幽谷とか太古の森という雰囲気ではないが、木々のたたずまいや枝ぶりがダイナミックであるのは期待通りで、しかも所々に現れる対岸の岸壁が素晴らしいものばかりであった。写真を何枚か写してみたがとてもその全容を捉えきれものではない。もともと私は岸壁に限らず石というものが好きなのだ。もちろんどんな石でもというわけではないが、そこらへんに落ちている石であっても色や表面の形状の美しいものを見つけるとワクワクする。



ルンツェという地方に向かう、クリ・チュという谷川に沿った山腹を走る道を上っていく途中



岩壁の壮大さを撮影するのは困難でした。



車の窓を半分開けている状態。

ダイヤモンドやサファイヤなどの宝石にはあまり興味がないがあまりメジャーではないラピスラズリ、ヒスイ、メノウ、水晶などや黒曜石などにはとても心ときめくものがある。名も知らない石であっても形が美しかったり面白かったりすると興奮するのだから、ましてや普段見られないようなすばらしい岸壁に（何がどうすばらしいのかというのは感覚の問題でもあるからなかなか言葉では説明できないが）出会うと全身でその岩肌を撫でまわしてみたいような願望にとらわれる。しかしそれは無理なことなので遠くから眺めるだけで満足しなくてはならないが。



ルンツェ・ゾン



ゾンというのは県庁と国分寺を兼ねたような施設

八時過ぎにホテルを出発し、三時間ぐらいでルンツェの中心部に着いた。山の上にあるルンツェ・ゾンに詣でる。ゾンというのはその地方の中心になるお寺であり県庁である。小雨が降っていたので私は折り畳み傘を出したが傘はだめだと言われた。お寺に詣でる時には帽子は取らなくてはいけないということは知っていたが傘もだめだということはこの時初めて知った。それで私たちは小雨に濡れながらの参拝となった。



ルンツェ・ゾンに登る途中の石段から谷を見下ろす。



右下に白く見えるのがクリ・チュの流れ。

例によって上手な説明はできないが、ルンツェ・ゾンは何だかとても美しいゾンだった。壁の白さが美しい

という感じ。ちなみに15日に行ったブムタンのジャンパ・ラカンは木造の木の部分の彩色が美しかった。(ラカンというのはお寺のことである。) このルンツェ・ゾンには建物が新しいのだろうかと思った。ソンに向かって登って行く石段の手すりのところから眼下のクリ・チュやその向こうの山々を眺めるのは壮観だった。参詣を終えると道路まで下り、次にコマ村という所に向かった。

コマ村はキシユタラという伝統的な織物で有名な村である。しかし工場とか工房とかがあるのではなく村の女性たちがそれぞれの家庭で各自の腕とセンスに物を言わせて織っている。この村に限らずブータンの女性たちは日本人なら編み物や手芸をするように各自で機織りをする。機織り機は日本昔話の「鶴の恩返し」に出てくる機織り機よりはもっと簡便なものであるが日本の反物ぐらいの作品は織れるようである。それで規定の長さのものを三枚織って繋ぐとフルサイズのキラになり、二枚繋ぎならハーフサイズのキラになると聞いた。

村は小さいが、意外に人家が密集していた。都会の建物の密集の仕方とは違うが、農牧業が主体の地域では家と家との間はかなり離れているのでこの村の光景はかなり新鮮であった。



民家のテラスのような場所で機を織る女性



村の中の商店

村に入っていくと町にもあるような商店があった。中にはいってみると雑貨に混じって織り糸や織り製品がいろいろ売られていた。しかし窓からの採光以外の照明がないので店内は暗く、あまり購買意欲をそそられない。大きいものは買えない、と言うとマフラーなどを見せてくれたが申し訳ないが気に入ったデザインではないし、そもそもマフラーはもう何本も持っているので不要。誰かにあげても喜ばれるとも思われないのでここでは何も買わなかった。でもある民家のベランダのようなところで(多分採光がよいからだろう)織物をしている女性がいたので写真を撮らせていただいた。

そしてさらにちょっと歩くと村の別の女性と行き会った。ガイドのキンレイさんが彼女に何か話しかけた。(知り合いではないと思う) そうすると相手の女性は「あるよ、あるよ。来て、来て。」という感じで私たちを近くの家の上階に招き入れた。こういう民家の上階というのは階段が外にあることが多いようだ。お寺とかゾンだと建物の中にも階段があるが、どちらにしても梯子に近いものでかなり急である。

それからブータンでも室内に入る時には靴を脱ぐのだ。ホテルやレストランは洋式になっているので靴をはいのまま入るが。しかしブータンや日本以外にも一般民家の中では靴を脱ぐという習慣の国はかなり多いように思う。韓国朝鮮もそうだし、イランなどもそうらしいし、アジア諸国は大概そうなのではないか? 洋式生活の普及の程度によって椅子やテーブルを使ったり使わなかったりの違いが出ているのだろう。ちなみにベッドは床より高くしてあるが椅子やテーブルは使わずに食事をしている国もあるようだ。例えばモンゴルのパオ(移動式テント)の中とか。

余計な話ばかり挿入して申し訳ない。そして上階に案内された私たちの前に、大きなビニール袋に詰めこまれた沢山の織物製品が持ち込まれて広げられた。小さいものならと言ったので、マフラーとテーブルセンター状のものがほとんどであった。



袋に詰めてあった製品を部屋中にうち広げて・・・



私が買ったキシュタラ織の小布四枚

私はやはりマフラーには心惹かれなかった。しかしキシュタラ織の絹の小布には大いに心が動いた。「自分が織った」とアピールしている女性が二人いて、一人は二十代ぐらいに、もう一人は四十歳前後ぐらいに見えた。それからもう一人年配の女性がその様子を眺めていた。私が気に入ったものを二枚選ぶとそれは二枚とも若い方の女性が織ったものだったそうで、「私の織ったものも買って！」と年かさの方の女性が言った。別に双方の技量に差異を感じたわけではなく単に最も気に入った色柄のものを選んだらそうなただけなのだが、まあ二枚だけではお土産用として足りないなと思ひさらにそちらの方からも二枚選んで全部で四枚買うことに決めた。

初めキンレイさんが通訳してくれたところによると、価格は二枚一組で2000ヌルタムということだったのでちょっと痛い出費だなとは思ったが、まあシルクだしと思ひ、全部で4000ヌルタムだなと考え了承した。ところがお金を渡したら「いや、一枚2000ヌルタムなのだ」と言われ、エーッ？と思ったが今更断れない。ひょっとして1000ヌルタム札（ブータンでは最高額紙幣）の束を見せてしまったのでボラれたのではないかという気もしてしまったのだが全部で8000ヌルタム？16000円とすると一枚4000円？シルクの手織りとは言えいい値段だなあ・・・と思いつつ、もう何も買い物しない！と心に決めて支払った。

（参考までに、四年前にパロの空港で買ったシルクのショールが5000円ほどだった。シルクの手織りだがピンクの無地でドロワークのような模様が入っていたが間違いなく今回の製品の方が手が込んでいるので4000円で納得できなくもない。）



写真映りが悪かったので・・・

またちょっと話が脇に行くが、ブータン旅行をする外国人にとっては交通費、宿泊費、通常の食事代は全てパック料金で支払い済みなので出発から帰国までに極端に言えばお金を使う必要が全くない。お土産代とお寺参りの際のお賽銭とホテルや関係者へのチップと自分で飲食物などを購入した場合以外は、であるが。飲料水については必需品なのでガイドさんが買って支給してくれたりホテルの部屋に必要なくらいは置いてあった

りする。生きていくためにはそれで十分である。

チップは義務ではないがしかしこれはお土産を買うよりも重要であると私は考えている。ホテルの部屋に置いてくるチップはテキトーでいいとしても何日間も付きっきりで世話をしてくれるガイドさんや超絶技巧的運転技術で安全に私を移動させてくれる運転手さんにはたっぷり謝意を示さなくてはならない。だからチップをいくら渡すかは予め考えておきその分は使ってしまうないようにキープしておく。お寺へのお賽銭は一件5ヌルタム、ホテルでのチップは一件100ヌルタムで済ませてしまったがガイドさんたちへのチップは一日あたり500ヌルタムまたは1000円または10ドルくらいで用意していた。このやりくりは結構大変だった。最後にちょっとだけインドを通る際にも別の運転手とガイドがつくことになっていたし、のちに書くが、途中からさらにもう一人運転手さんが登場することになったのだった。

さてコマの村を後にして私たちの車は再びモンガルに戻る。そのころもうお昼を過ぎていたが、このルートには食堂というものはないので、それで多分夕べ泊まったホテル「ドック・ジョンカル」に頼んで用意してもらってあったのだろう。帰りの道の途中で食べられるようにとガイドさんたちがお弁当を持参してくれていた。もちろんそれは日本風の弁当箱ではない。車で運べるからあまり大きさや重さを考慮しなくてよかったせいかもしれないが、ジャーのようなものに入ったご飯とアルミパックに入ったおかずが何種類か。食べる時に温かかったから保温ケースに入れてあったんだと思う。



帰路の途上でお弁当を広げる。

帰り道の途中にあった屋根とベンチのある休憩所みたいなところで食べた。近くに犬が2~3匹うろうろしていた。私は食べきれなかった物をどうしようかなと考えていたが、思いついて犬たちにやることにした。ブータンの肉料理というのは何故か骨付きのまま角切りのようにしたものを佃煮のように甘辛く煮付けてある。だから食べながら口から骨を出さなくてはならない。それでその骨も投げてやった。犬たちは喜んできれいに完食した。

いつも必ずエサにありつけるわけではないブータンの犬たちの食糧事情は大変厳しいようだ。野良犬の問題というと、ともすれば狂犬病の予防とか避妊手術をすとかしないとかそちらのほうにばかり議論が行くが、もちろんそれは大変重要なことであるが、犬たちにとってはそれ以前に飢えずに暮らしたいという希望の方が第一にあるのではないだろうか？七年前に初めてブータンに来た時には犬たちは人間とは別に自由に生活しているように見え、エサも誰かから適度に与えられているように見えたのであぁ、ブータンの犬は幸せなんだなあと思っていたのだが、なぜか三度目ぐらいから体力がなくて動けないみたいな犬たちが目に付くようになりとても気になっていた。政府は年に二回ぐらいずつ野犬狩りを行って不妊手術や狂犬病予防注射をほどこしているとキンレイさんが言っていたが飢えたり栄養失調で皮膚病になったりで苦しんでいる犬たちのためにもなんとかしてほしいものだと思う。

夕方ホテルに戻ってくる。何千ヌルタムはもちろん何百ヌルタムの買い物もするつもりはもうないのだが今後のお賽銭やホテルのチップ用の小銭がなくなってしまったので両替をしなくてはならない。それでホテルの

近くの店に行き、インスタントラーメンがあったので二つ買うことにして1000ヌルタム札を出してみた。すると店番の女性が「お金が多すぎる。」と言って怒った。いやそんなことはわかっている。「おつりを下さい。」と言うと「ない!」と言う。困ったなあ・・・本当にこっちは1000ヌルタムしかないんだ、と思っているとしぶしぶという感じでお釣りをくれた。ラーメンは一つ15ヌルタムだった。



ブータンのインスタントラーメン

ホテルで、コンセントからの充電ができないと思い電池式でやっていたが何だか調子が悪くなる。もう電池がなくなった？が、19:50ごろ洗面所のコンセントが使えることに気づく。ヤレヤレよかった！シャワーを浴び髪を洗った後備え付けのドライヤーを使ってみた。私は今まで自分でドライヤーを使ったことがほとんどない。めんどくさいのである。洗髪後はいつもタオルを使って自然乾燥。だってあの音がうるさい。時間がかかってイヤ。腕が疲れる。それはダメだといって美容師さんがいろいろアドバイスをしてくれるのだがハイハイと言いながら無視している。でも今回は使ってみた。軽いのであまり苦にならなかったがやはり私はせっかちだ。半分ぐらいのところをやめてしまう。

【 下の部に続く 】